連載⑦

明治大学寄付講座をのぞいてみた

～組合による社会貢献のカタチ～

川本委員長、明大の教壇に立つ

「私の半生を通じた自治労運動をお話します」

7月10日、明治大学駿河台キャンパス「リバティタワー」10階1105教室に姿を現したのは、自治労本部の川本淳委員長。「役場を辞めて、東京でなぜ労働運動をしているのか。これまでの私を振り返りながらお話します」と切り出すと、学生の視線は川本委員長に注がれた。講義のタイトルは「私の半生と労働運動～一人ひとりが行動すること～」。幼少期から現在までの歩みを通して、自治労運動について語る講座だ。

▲学生に講義を行う川本委員長

「人口が2千人に満たない北海道中川町の出身で、地元の著名人はプロレスラーです。若い皆さんは知らないかな」。保育所から就学後も家近くの無人駅から汽車（電車ではなくディーゼルカー）通学で、当時の国鉄によるストライキを体感した。ストになると休校になるためストを楽しみにしていたそうだ。中川町役場に入ると先輩に連れられ、何となくレクリエーションや学習会に参加。国鉄や営林署など他職種の人との交流を通じて職場の不安や悩みを出し合った。

転機は、国鉄民営化と北隣の幌延（ほろのべ）町による高レベル放射性廃棄物処理施設誘致で、前者は働く人が簡単に首を切られる怖さを痛感。後者では酪農が盛んな地域で風評被害による基幹産業への影響を懸念する農民と労組で反対運動を展開。自らも運動を引っ張り、道知事も反対を表明し、誘致を食い止めた。住民との連携やあきらめず運動を続けることの重要性とともに、政治の大切さを訴えた。これらの体験を踏まえ、公共サービスを守り、地域や社会に関わる取り組みを進める自治労の運動を伝え、講座は終了した。

学生にとって難解な用語を極限までかみ砕いてわかりやすい表現で話す姿が印象的だった。講座後、川本委員長は「就職すると多くの職場では労組がないし職場のルールを教える人は少ないかもしれないが、労組やそれに加入することの大切さを知ってもらえたら」と話した。